

# 児童文化財の有効活用の育成に関する考察 —子ども文化論と幼稚園教育実習との関連を通して—

田中卓也<sup>1)</sup> 日隈美代子<sup>1)</sup>

## A study on the activity of utility of using cultural materials for children —Through relevancy between theory of child culture and student teaching at a kindergarden—

Takuya Tanaka, Miyoko Higuma

### Abstract

執筆者は、子ども文化論の講義内で行う児童文化財の活用を通じて、その後実施される幼稚園教育実習とのつながりについて考察、検討を試みた。子ども文化の内容は幅広く子ども観の変遷や児童文化財の種類と特徴、児童文学、伝承遊びや絵描き歌、わらべ歌、さらには絵本やお話(素話)、紙芝居、さらにはペープサート、パネルシアター、エプロンシアターといった新しい文化財にいたるまで数多く存在する。これらのものに年中行事が加わることでさまざまな幼稚園や保育園、認定子ども園の子どもに活用している。また児童文化財を使用した遊びにも受講生にはチャレンジしてもらっており、実習における部分指導などに困らないためにも、多くの時間を割いている。

幼稚園教育実習後、実習生はさまざまな保育指導を受けることになるが、「理論と実践」の結びつきについて、考える機会を得ることになる。児童文化財の活用経験は実習につながっていることを反省や振り替りを通じて、その重要性を認識することになる。

**Keywords:** practical teaching children, student teaching at kindergarden, theory of child culture, teaching training guidance

### 1. はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—

幼稚園教育実習や保育所実習などにおいて、実習生は「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」に示されている乳幼児の成長・発達年齢やその特徴についてしっかり理解した上で実践を行うことが重要である。その際には、絵本や紙芝居、パネルシアターやエプロンシアターなどを活用することが多い。

先行研究に八幡真由美「児童文化財の保育における効用に関する一考察—領域言葉の側面から紙芝居を中心に—」(『上田女子短期大学 紀要』(第30号、2007年、1～2ページ)

がある。同論文では紙芝居の特性は保育に適しており、保育者がそれをいかすことで子どもたちの言葉の育ちが育まれていくことが明らかにされている。

青木恭子「児童文化財を活用した保育実技の質的向上を考える」(『鳥取短期大学研究紀要第50年記念号』(2004年、1ページ)の論文では、実習後に提出された学生のレポートから、児童文化財を活用した保育実技の有効性について見出している。執筆者は、子ども文化論の講義内で行う、児童文化財の活用を通じて、その後実施される幼稚園教育実習とのつながりについて考察、検討を試みようとする

<sup>1)</sup> 静岡産業大学経営学部  
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

<sup>1)</sup> School of Management, Shizuoka Sangyo University  
1572-1, Owara, Iwata-shi, Shizuoka

るものである。

保育者養成校では、保育の基本としての計画性および実践力などが身につくように指導を行うだけでなく、資質や専門性を十分に備えた高い保育者を要請しなければならない。そのためには、保育者をめざす学生に対し、将来の保育現場において実践を行う上で「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の理解は重要となる。

保育者養成校に在勤し、保育者養成に携わる教員には、この基礎についてしっかり学生に伝えていかなければならない。

本研究では、児童文化財を活用することを主眼においた子ども文化論の講義と同科目における学習内容の実践的教科でもある、幼稚園教育実習について考察することで、今後の実習の進め方や学生の指導などに有効に活用できることを目的としている。

## 2. 授業内容とその方法

### (1) 子ども文化論

「子ども文化」とは一般的に、子どもの遊びや行事を通じて形成される子ども独自の文化である。意味については諸説存在するが、大方については未就学あるいは義務教育段階である子どもが子どもら独自で、もしくは保護者や教師をはじめとする大人からの示唆や指導を受けながら形成し、その多くは子どもの成長過程で使われる様々な道具(おもちゃ)により、創造性、想像力など脳の発達とともに、文化的意味合いを持つものである。

本講義は前期15回の講義を通して、子どもの遊びや文化の基礎的内容の習得をめざすものであり、学生等が将来保育現場において、どのようなかたちで取り組んでいくべきかを学生とともに考えていくものである。とはいえ、子ども文化は幅広い内容である。子ども観の変遷から児童文化財の種類と特徴、児童文学、伝承遊びや絵描き歌、わらべ歌、絵本やお話(素話)、紙芝居、ペープサート、パネルシアター、エプロンシアターといわれる新しい文化財に至るまで数多く存在する。

これらのものに年中行事が加わることでさまざまな幼稚園や保育園、認定子ども園等で

活用されている。また児童文化財を使用した遊びに、受講生にはチャレンジしてもらっており、実習における部分指導などで困らないためにも、多くの時間を割いている。

また児童文化財を使用した遊びを行う際には、季節やねらい、内容、環境構成、支援の情報、幼児の姿などについても視点に取り入れながら、考えさせるものとしている。

児童文化財は、基本は講義担当者(第一執筆)のほうで事前に準備しておく。また足りない場合などは保育関連教員から貸借して使用することもある。

### (2) 幼稚園教育実習

幼稚園教育実習は、基本的には3歳から5歳の幼児を対象とするものであり、預かり保育を行う園が増加していることから、満2歳児からの保育も行われるようになってきている。いずれにせよ、子どもらの発達段階をよく知り、それに応じたかかわり方について具体例を挙げながら、習得していくことが求められる。手遊びやふれあい遊びなどはケースバイケースで実践されなければならないため、実習学生の間で議論を通じた意見交換を随時行わせている。

教育実習事前指導の実施に際して指導案の作成や日誌の書き方について丁寧に指導を行っている。しかし、学生の能力差のため、指導についても差が出る。全ての学生に均等な指導とはいかず、実習までに予定通り終わらないことも多々ある。

また指導案の書き方については、どの園においても一律であることはまずなく、各実習園によって求めているものが異なることもある。そのため、実習学生には、実習園の指示にしたがって書くようにさせている。

子ども文化論の講義内では、そこまでの時間は見込めないことが多いため、講義内で書かせることもある。グループワークをさせているため、グループのメンバー同士で確認させている。後日提出してもらおうが、執筆者はおおまかな確認のみである。

教材研究については、季節を考えながらそれにふさわしいもの、ペープサートやでんで

ん太鼓などは実際に制作させており、実習に持参する学生も少なくない。なかには制作の苦手な学生も存在するため、意欲が持てず、集中力がきれてしまい、友人とおしゃべりをしたり、制作時間が他の学生以上にかかり、取り掛かるのも遅いこともあるため、うまい下手を度外視し、「これこそ、自分のもの」と思われるものを作らせるようにしている。

一方で制作を楽しみにしている学生も多く、工夫を凝らしたりすることがある。これについては加点として評価に加えている。課題も見られるが、今後もこのような形で指導を徹底しようとする。

かくして子ども文化論は、実習につながる講義として、幼稚園教育実習と組み合わせながら行っている。また学生らは各自でボランティアに行く者も存在し、子ども文化論で学んだ絵本の読み聞かせ、紙芝居の演じ方、手遊びなどを実習前に取り組んでいる。また第一執筆者はゼミ（専門演習）を担当していたこともあり、執筆者ゼミの名称「子どもの遊び・文化&教職総合実践ゼミ」に所属する幼稚園教諭、認定子ども園就職希望者らは、近隣の私立幼稚園に出向き、この経験は大いに活用している。いずれにせよ実習にいきるものとして有効であることがうかがえる。

### 3. 学生らの意見より

幼稚園教育実習から戻ってきた10名の学生に意見を聞くことがあった。学生の話によれば、児童文化財の活用について、具体的に絵本の読み聞かせの実践にかかわる有用な指導や助言を受けている。「絵本を読む際の高さに気を付けてと指導を受けた」学生や「ゆっくりな速度で、十分な間を取りながら子どもたちを夢の世界につれて行けるような雰囲気を作り出すことを忘れないでほしい」、「多くの園児の目の届くような配慮も必要である」などさまざまな指導を受けていることがうかがえる。

この聞き取りにより学生自身が実習を振り返ると共に反省も行うことができた。振り返りの反省の中でも見られたように「事前準備をして、子どもとのかかわりのイメージト

レーニングをしたうえで、練習を重ねて実習に臨んだけれども、自分の思うようにできないことがたくさんあった」という声を、多くの学生から聞いている。実習生たちはそこで「臨機応変な対応」が必要であることに気づいていることがうかがえる。「臨機応変な対応」とは言葉通りその場の状況に応じた行動することである。つまり、子どもの様子はその時々変わるものであり、その時に応じた対応の仕方が現場で求められる。しかし保育現場では突如起こることが多く、学生はその対応に困ることが多い。

その際には実習担当者として「子どもの気持ちを考えてみよう」とか「子どもの気持ちに立ってみよう」と学生に伝えることにし、子ども側に立場を変えることで、対応がスムーズにできるようになるより指導する。学生たちには一見簡単なようにも見えるが、彼らはそれらの内容を頭で理解しても実践までには至らないようである。一度経験すると自信がつき、できるようになっていくものである。このような対応をできるようになることが、一番大事である。

このことを基に子ども一人一人を1クラスで指導していくのは、とても困難なことである。しかし保育者になる学生にとってはこのことを理解した上で「生きる力の基礎」を育てられるように努めていくことが大切である。それだけに、「臨機応変な対応」が求められるのである。現場の教員でも難しいことであるが故に学生にとって大きな課題である。将に理論と実践の交わりであるだけに、理解し難いところでもある。

かくして「子ども文化論」と「教育実習」の結びつきにより関連性が成り立つものであることが学生の中で少しその結びつきについて理解できたようにうかがえる。

### 4. おわりにー理論と実践の結びつきの難しさー

保育者をめざす学生にとって、理論と実習を結びつけるのは大変難しいものである。例えば自由遊びを考えた場合、子どもたちは自由に自分を出して主体的に活動していくものである。その活動の中には五領域が含まれて

いることを保育者は理解しておかなければならない。「友達と遊ぶ(人間関係)」、「小動物・自然に触れる(環境)」、「人に思いを伝える(言葉)」、「遊びを自分なりに考え進める(表現)」、「活動的に身体を動かす(健康)」とたくさんの子どもの姿が見られる。そこに保育者の言葉の援助や環境構成によりそれぞれの遊びが大きく広がるものである。この繋がりを理解することが大切である。実践を頭で理解していても、実際に実践することは難しいものである。今、学生ができるのは実習で一日一日を大事にしながら経験を積み重ねて学ぶことである。回数を重ねることにより、子どもへの関わりと学生の課題である「臨機応変な対応」が身に付くものであると考える。

指導においても幼児教育は子ども主体の保育でなければならない。如何に子どもの姿を見て成長に何が必要か考えていかなければならないものである。答えが常に未知であるため、幼児教育は探求心を持って追い求めなければならないと思われる。そこには楽しさもあり、難しさもある。日々、子どもと向き合いながら「ワクワク感」を持って子どもとかかわらなければならない。即ち「共感をする」ということが大事であるのである。

学生はよく幼稚園教育は「教育」という表現をする。学生たちが普段学校で学ぶように、子どもたちも幼稚園で学んでいる『遊び』は『学び』である」と指導書は謳っていることもあり、学生たちの考えを一層そうさせているのであろう。

保育はこれから生きていく上での人格形成の土台であり、まさに集団生活のスタートラインである。そこで、保育者となる学生たちに、「子どもはどのようにしたら、頑張ろうとするのか」、「笑顔になるのか」、「自信をもつのか」について考えることをこれからも促進するように努めたい。

#### 【引用文献・参考文献】

1) 戸江茂博監修、田中卓也・松村齊・古川治・川島民子編。保育者・小学校教諭・特別支援学校教諭のための教職論。北大路書房、2013

- 2) 田中卓也・藤井伊津子・橋爪けい子・小島千恵子編。明日の保育教育にいかす子ども文化。溪水社、2016。pp1～3。
- 3) 谷田貝公昭監修・高橋弥生編。幼稚園教育実習一芸社、2012
- 4) 青木恭子「児童文化財を活用した保育実技の質的向上を考える」鳥取短期大学研究紀要第50年記念号。2004。p1
- 5) 八幡真由美「児童文化財の保育における効用に関する一考察—領域言葉の側面から紙芝居を中心に—」上田女子短期大学 紀要第30号、2007。p1
- 6) 鈴木隆「幼稚園教育実習のあり方について—実習調査から読み取る実習の実態—」立教女学院短期大学紀要第48号、2016
- 7) 二宮貴之・櫻井京子・井上聖子「幼稚園教育実習 I 実習指導の取り組みについて」(研究ノート)。西九州大学子ども学部紀要第6号、2015
- 8) 二宮貴之・櫻井京子・井上聖子「幼稚園教育実習 I 実習指導の取り組みについてその2」(研究ノート)。西九州大学子ども学部紀要第7号、2016。pp2～4
- 9) 共栄大学共栄大学教育学部教育実習のしおり(ハンドブック) 共栄大学、2011
- 10) 間井谷容代「学生の保育計画力の育成に関する一考察—教育課程総論と幼稚園教育実習との関連を通して—」白百合女子大学紀要第14号、2017。pp1～5
- 11) 福山多江子・永井優美「保育者養成における実習の意義—実習の振りかえりから見る学生の成長(その1)—」東京成徳短期大学紀要。第48巻、2015